

# 三重の植物防疫

No. 69

令和7年1月1日発行

発行所 一般社団法人 三重県植物防疫協会 三重県松阪市嬉野川北町530番地

TEL 0598 (42) 4349

FAX 0598 (42) 4705

URL <http://miesyokuboukyoukai.p-kit.com/>

## 主 な 記 事

ごあいさつ .....	2
桜～儂げだが、しぶとい樹の新しい戦い .....	3
近年の果樹カメムシ類の発生状況 .....	7
事務局だより .....	12

(題字は一般社団法人三重県植物防疫協会 会長 西場 信行)

## 新年あけましておめでとうございます

一般社団法人三重県植物防疫協会

会長 西場 信行



新年あけましておめでとうございます。

旧年中は、一般社団法人三重県植物防疫協会の事業運営につきまして、多大なるご協力、ご支援をいただき誠にありがとうございました。

新型コロナウイルス感染症の対策が収束に向かい、制限されていた行動もかなり緩和されました。感染症の流行により、インターネット回線を使ったオンライン接続が普及しましたが、協会主催の講演会、会議においても、対面参加とオンライン参加の併用を基本に開催しています。

昨年は元日の能登半島地震の発生、8月の宮崎県を震源とした地震により南海トラフ地震臨時情報（巨大地震注意）が発表されました。さらに、夏期の平均気温が観測史上最高となり、記録的な大雨による水害が全国各地で発生するなど、国民が自然災害の脅威にさらされるとともに、農作物の生育、収量、品質の低下など大きな影響がありました。

さて、農業を取り巻く情勢は、農業資材の価格高騰、気候変動による気象災害の発生など、農業経営や畜産経営に大きな影響を及ぼしています。また、植物防疫を取り巻く情勢は、2021年に国が策定した「みどりの食料システム」に対応した化学農薬使用量の削減や、有害動植物の国内外における発生に対処し植物防疫を確実に実施するため2024年に植物防疫法が改正されるなど、転換期を迎えています。さらに、県内の病害虫の発生に目を向けますと、昨年はコムギ赤かび病、果樹カメムシ類、チョウ目害虫が多発し、農作物に被害が出ました。

農業を取り巻く環境は大きく変化しており、植物防疫をめぐる状況は複雑化しています。協会は情勢の変化や病害虫の発生の動向を踏まえ、農薬登録支援に向けた試験の実施や資材展示圃の設置、植物防疫に関する各種情報の提供など、植物防疫を通じて本県農業の振興、三重県民の利益増進に寄与できるよう、行政、関係団体等の植物防疫関係者と連携して取り組んでいく所存です。

関係者の皆様方が健康で良い年になりますよう祈念するとともに、変わらぬご支援とご指導をお願いいたしまして新年のご挨拶といたします。

# はかな 桜～儂げだが、しぶとい樹の新しい戦い

東海物産株式会社・樹木医

大石 浩

## 1. はじめに

みなさんは、「樹木医」という言葉を聞かれたことがあるでしょうか？その名のとおり樹木をメインとした植物のお医者さんです。全国には3,000名あまりが登録されており、三重県下では、二十数名が活動しています。私自身、農薬や農業・緑化資材の販売会社に勤めており、薬剤の販売や防除に携わっていますが、それに関係して今までいろいろな木を見せていただきました。入社当時は、マツ材線虫病（通称：松くい虫）でマツノマダラカミキリやマツノザイセンチュウと取っ組み合いをしていました。その後、縁あって樹木医となり、多くの樹木、特に防除関係でかかわりを持たせてもらっています。樹木医といえば、元々は天然記念物などの貴重な木の診断、保全の仕事が多いというイメージでしたが、しだいに公園や工場などの緑地帯や神社仏閣、一般家庭の方からのご相談も増えてきており、いろいろな種類の木の話に、外科・内科・小児科・その他を含めた広い守備範囲で、専門の得意技を持つ方々と協力してお答えしております。仕事の流れに関係して防除の話が多いのですが、この頃は倒木や枝の落下による事故があちこちで起こっている事から、危険な木の相談や診断調査が増えてきています。「いつ倒れますか？」「どのくらい保ちますか？」とよく聞かれますが、残念ながら「わからない」と言うのが本当の所です。そこで、まずは危険を除くということをメインに処置を考えますが、なかなか難しいものがあります。

## 2. 樹木医として桜への関わり

たくさんの樹木の中で、三重県はもちろん、日本中どこへ行ってもいちばん良く見られ、親しまれている木が桜です。諸説ありますが、それこそ1,300年以上前の「日本書紀」や「万葉集」の時代から山桜の記述があるそうで、野生種（山桜、江戸彼岸、大島桜、豆桜、ちょうじざくら丁子桜など）に加え、多くの園芸品種があります。近年では、三重県を含む紀伊半島で、100余年ぶりに新種の野生種である「クマノザクラ」（熊野桜）が発見され、野生種10種類を含む300種以上の品種が国内に生息し栽培されています。また



長尾 美春桜



小森の妙光桜

図1 クマノザクラ（奥田清貴氏 撮影）

県内には国指定天然記念物の「白子不断桜」(鈴鹿市)を始め、国指定名勝「三多気の桜」(津市)、県指定名勝「宮川堤の桜」(伊勢市)など数多くの桜の名所があります。

桜は、特に染井吉野に象徴されるように、卒業式や入学式などの人生の節目に印象深く関わっており、このところ以前とは開花時期が変わってきていますが、一斉に開花し花数が多い豪華さのため多くの人々に好かれています。しかし、その一方で、眺める花は愛でるものの、間近に住んでみえる方には、花柄や落ち葉の掃除、ケムシ類などの害虫発生、敷地への根の侵入などいろいろな困りごとが出ています。桜の代表品種である染井吉野では、寿命が短いとか、腐朽が入りやすく危険木になりやすいなどと言われています。桜は個人の庭に植える場合もありますが、緑地帯、公園、学校、沿道や堤防など多くの人に関わる場所に植栽されることが多い樹木です。そういう場所の桜に思い入れの強い方もたくさんみえるので、衰弱や枝や幹の一部が枯れたりして相談を受けた場合、対策をどうするかということが悩みの種になって来ています。冷静に見て、倒木や落枝など危険性が明らかな場合は、伐採・剪定などの話をします。伐採の場合、なかなか関係者全員の納得を得ることが難しく、すったもんだがあり、最近ではセカンドオピニオンを求める話も出たりします。このこと自体は必要で良いことだと思うのですが、なかなか手ごわい案件が増えてきています。

満開の花や散り際を見ていると、それこそ世の無常、儚さにつながるといわれますが、樹自体はしぶとく、弱ってきてもギリギリまで満開の花を見せる場合が多く見られます。さらに「ひこぼえ」などを出して、次代に備える成長を行います。樹木には幹年齢と株年齢という考え方があります。幹年齢とは年輪に刻まれるように、ひとつの個体(世代)として成長し、花を咲かせ、実をつけて、やがて衰弱して枯れていくという動物と同じように捉える見方です。これに対して株年齢は、樹木のように地上部はいったん滅んでも、地下部(根)が生存していて、再度そこから成長パターンを繰り返すというもので、同一の遺伝子型を維持しているため、個体は変わっていないという見方です。もちろん地上部が枯れば、地下部も枯れてしまうことも多くあるため、全ての場合が上手く当てはまる訳ではありません。

現在、河川堤防などは、法律により新たに木を植えることができなくなっています。また可能な場所でも予算的にも新しく植え替えることが難しくなる中、根気と時間はかかりますが、かかる費用がわりと少なく済む方法として、現存する桜の「ひこぼえ」を再生していく考えが増えていくと思います。特に第二次世界大戦後に植栽された桜の名所は、今曲がり角を迎えており、維持や更新には担い手を始めとして、肩肘張らず続けられる形の管理・見守りが必要ではないかと思っています。

また最近では、いろいろな桜の品種を混植し、最長2週間弱程度だった花見の時期を延ばそうとする動きも出ています。私は、住まいのまわりに10種類以上の桜を植えています。3月初旬の河津桜から江戸彼岸、熊野桜、山桜、大島桜、そして染井吉野、さらに園芸品種の陽光こうか、紅華きんげ、旭山きょいこう、御衣黄ごいおうから駿河台するがだいの4月下旬まで様々な桜の花が見られます。日本花の会や日本さくらの会など、いろいろな団体が、全国に桜の苗木を配布しています。今までは染井吉野が多かったですが、樹齢や病気の関係で今は「神代曙しんたいあけぼの」などに代わってきています。染井吉野はクローンであり、全ての染井吉野が同じ遺伝子を持っています。全国に同一のものが数えきれないほどたくさんあることは、よく考えれば驚きのことではないかと思っています。

### 3. クビアカツヤカミキリの発生

今、桜が大きな脅威に遭遇しつつあります。それは、特定外来生物に指定されている「クビアカツヤカミキリ」による被害です。クビアカツヤカミキリは中国原産とされ、幼虫が樹幹内に侵入して内部を

食害し、放置しておくとも数年で桜を枯らしてしまいます。2012年に国内で初めて愛知県飛島村で確認されました。現在、関東、関西および東海地区南部など14都府県で被害が出ており、じわじわとその生息域を広げています。三重県では2019年に県北部で成虫が確認されました。



雄

左：雌 右：雄（触角の長さが違う）

図2 クビアカツヤカミキリの成虫

クビアカツヤカミキリは、大陸では、桃や李などバラ科の果樹に被害を与えていますが、日本では、どこにでも大きな桜があり、絶好の食糧庫および住処として、これ幸いと定着してきています。一番大好きなのは桃らしいですが、桜では染井吉野が好きそうな感じです。

成虫はその名のとおり首(胸)の部分赤く、日本のカミキリムシ類の数倍以上の繁殖力を持っています。特徴的なのは幼虫の排出するフラス(幼虫が排出する木屑と桜の樹脂が混じったもの)で、時期や幼虫の大きさによりいろいろな形態があります。典型的なフラスは、麺状の細長い形で、その中に削ったような繊維が混じり、白色または油で揚げたような色をしており、つぶつぶのある硬めのうどん・ラーメン・スパゲッティなどに例えられます。しかし、時期により他のカミキリムシやコスカシバのフラスと似ている部分もあり、ある程度慣れないと判別には苦労します。



図3 典型的なフラス

防除対策で一番手っ取り早いのは、フラスを見つけしだい伐採することですが、なかなかそうもいかない事情が多い中、いろいろな防除方法がトライされています。成虫に対しては発生時期に殺虫剤を樹幹を中心に散布します。幼虫に対しては、樹幹注入剤を注入したり、フラスの排出孔にエアゾール剤を噴霧します。しかし樹幹内に居るため、どうしても取りこぼしが発生します。現実には幼虫防除を行うと同時に、夏から秋にかけて桜の状態やフラスの発生状況を定期的に観察し対応することが必要です。



図4 さまざまなフラス

2024年の秋以降、三重県内でも被害が拡大してきていますが、何よりも大切なことは早めにフラスを見つけることで、見つけしだい、伐採または幼虫を防除してその密度を減らすことです。初発見は成虫によるケースが多いですが、発見後にまわりを調査すると既にフラスが見られることがあります。場合によっては、成虫の羽化脱出した孔が見つかったりするので、既に繁殖していた可能性が考えられます。クビアカツヤカミキリの幼虫は2～3年ほど樹幹内に居ることから、いったんフラスが止まっても再度出てくる場合があり、一度フラスを見つけたら最低2～3年は観察を続ける必要があります。



図5 クビアカツヤカミキリの幼虫

#### 4. おわりに

現在、日本に侵入したばかりで、問題となりつつあるカミキリムシが他に2種類います。「ツヤハダゴマダラカミキリ」と「サビイロクワカミキリ」です。ともに三重県では未確認と思いますが、両方とも幼虫が樹幹に侵入し、内部を食害します。ツヤハダゴマダラカミキリは多種類の樹木を加害するので、特に注意が必要です。クビアカツヤカミキリを含め、今現在、防除方法が確立されているとは言い難い所はありますが、早めに見つけ、早めに対応するのが有効なのは明らかです。それには、多くの方の目配りによって成虫やフラスを見つけ、居場所を特定し、こまめに防除していく根気のいる作業が必要となり、それを数年単位で継続することが効果的な退治につながります。自身、入社して最初にマツノマダラカミキリと出会い、30余年の時を経て、今度はクビアカツヤカミキリに遭遇しています。両者ともなかなか手強い虫ですが、ある程度の密度まで封じ込めれば、共存？もできていくのかなと思います。そのためにも、この記事をご覧いただいた方をはじめ、多くの方のご協力により、桜を始めとする木々を守っていきたく考えています。どうぞよろしく願いいたします。

---